

「英語ノート」を活用した 小学校外国語活動の在り方とこれからの教員研修

ーコミュニケーション能力の素地を養うためにー

中 谷 幸 子

平成23年4月より、新学習指導要領が完全実施となり、小学校5・6年生で年35時間の外国語活動が必修化される。「英語ノート」は小学校外国語活動の目標である「コミュニケーション能力の素地を養う」ための共通教材として文部科学省より平成21年度配付された。「英語ノート」の活用の仕方は付属の指導資料、CD、デジタル教材も含めて、平成21・22年度移行措置期間の中で、それぞれの学校において研究していく必要がある。そこで、先行実施1年目となる平成21年度の実践に基づいたアンケート結果から課題を明らかにし、平成22年度における研修講座や小学校外国語活動指導者養成研修、要請訪問研修等における教員研修において「英語ノート」を活用した外国語活動の進め方について提案する。

〈キーワード〉 小学校外国語活動、コミュニケーション能力、英語ノート、教員研修

I 主題設定の理由

平成20年3月に公示された小学校学習指導要領における小学校外国語活動の目標は次の3つの柱から成り立っている。

- 1 外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- 2 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- 3 外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

これら3つの柱を互いに関連させながら、「コミュニケーション能力の素地を養う」ことを目標として掲げている。しかし、「コミュニケーション能力の素地」をどのようにとらえるのか、そして、その目標のためにどのように授業を進めていけばよいのかということに関して共通理解がなされていない。そのため、当然のことながら、小学校外国語活動の共通の指導内容を示すために文部科学省が編集した「英語ノート」の活用についても様々な課題が見えてきた。小学校外国語活動に関する悉皆研修のアンケートにも、「英語ノート」の良さを認める一方で、どのように活用していけばよいか分からないということが問題点として多く挙げられていた。そこで、先行実施となった21・22年度の小学校外国語活動の在り方から見えてくる成果と課題について検証し、これから、児童や学校の実態に応じて、どのような「英語ノート」の活用が考えられるのかを提案する。そして、これからの校内研修も含めた教員研修の在り方について考察することで、平成23年度の全面実施から各小学校において外国語活動が推進できると考え、本研究主題を設定した。

II 研究の目標

本研究では、まず、新学習指導要領の外国語活動の目標が示す「コミュニケーション能力の素地」について明らかにするとともに、先行実施期間での「英語ノート」による外国語活動の成果と課題を考察する。次に、「英語ノート」の構成を概観し、指導資料、CD、デジタル教材の効果的な活用について提案する。また、先行実施期間での教員研修を振り返り、校内研修を含めたこれからの教員研修の在り方について考察する。

Ⅲ 研究の方法

1 新学習指導要領における外国語活動の目標と「英語ノート」

- (1) 小学校外国語活動における「コミュニケーション能力の素地」について明らかにする。
- (2) 「英語ノート」の指導資料に示されている活動ごとに、活用の工夫について考察する。

2 先行実施で見られた成果と課題

- (1) 「英語ノート」活用状況アンケートから小学校での実践を振り返り、平成21年度の移行措置期間における成果と課題を考察する。
- (2) 「英語ノート」を活用した自校プランに向けて、今後研修していくべき項目について考察する。

3 「英語ノート」を活用した授業づくり～「英語ノート2」“I want to go to Italy.”の実践より～

- (1) 課題解決型の単元構成の授業実践を行い、児童の意識の変容を明らかにする。
- (2) 「英語ノート」の指導資料の評価の観点に基き、振り返りカードによるポートフォリオ評価について提案する。

4 教員研修の現状と課題

- (1) 福井県における中核教員研修の在り方を、教職員研修講座と小学校外国語活動指導者養成研修から振り返る。
- (2) 要請訪問研修を含め、これから求められる校内研修の在り方を考察する。

Ⅳ 研究の内容

1 新学習指導要領における外国語活動の目標と「英語ノート」

- (1) 小学校外国語活動における「コミュニケーション能力の素地」

① コミュニケーション能力の素地とは

小学校外国語活動の目標は「コミュニケーション能力の素地を養う」ことである。この「コミュニケーション能力の素地」について、菅(2010)は「素地とは、人とコミュニケーションを図る際の情意的、態度的な面を指しているのである」とし、情意面・態度面について「人と積極的に話をしようとしたり、人の話を一生懸命聞こうとしたり、人と交わろうとすること」としている。つまり、外国語を使って「自分のことを相手に伝えたい」「相手のことを知りたい」という思いを育てることが「コミュニケーション能力の素地を養う」ことになるわけである。中学校では「コミュニケーション能力」を「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなど」と明記されているにもかかわらず、小学校においては「コミュニケーション能力の素地を養う」ということが、果たしてどのようなことを指しているのか具体的に示されていない。この言葉のみが流布してはいるが、その本質についての理解が不十分である。そのため、小学校の学級担任にとっては、「英語をどうやって教えればいいのか」といったスキル面での不安が最も大きい。小学校外国語活動の目標は「英語で会話すること」ではなく、相手が伝えようとしていることを分かろうとしたり、相手に何とか伝えようと努力したりする気持ちや態度を養うことにあるととらえ、まずは、ここから外国語活動の在り方を見直す必要がある。

② 「楽しい」外国語活動とは

福井県内の小学校では、先行実施期間以前にも、1年から6年まで時数に差はあるが、各校の年間指導計画に基づいて英語活動を実施してきている。これまで実施されてきた英語活動について、児童はどのような意識をもって取り組んでいたのか、中学1年生へのアンケートによる意識調査を行った。

対象：福井市内の中学1年生（回答数127名）
 期日：平成21年5月中旬実施
 内容：小学校の英語活動で楽しかった活動（選択式・記述式）
 小学校でやったことが、中学校で役立ったと思われる内容（記述式）

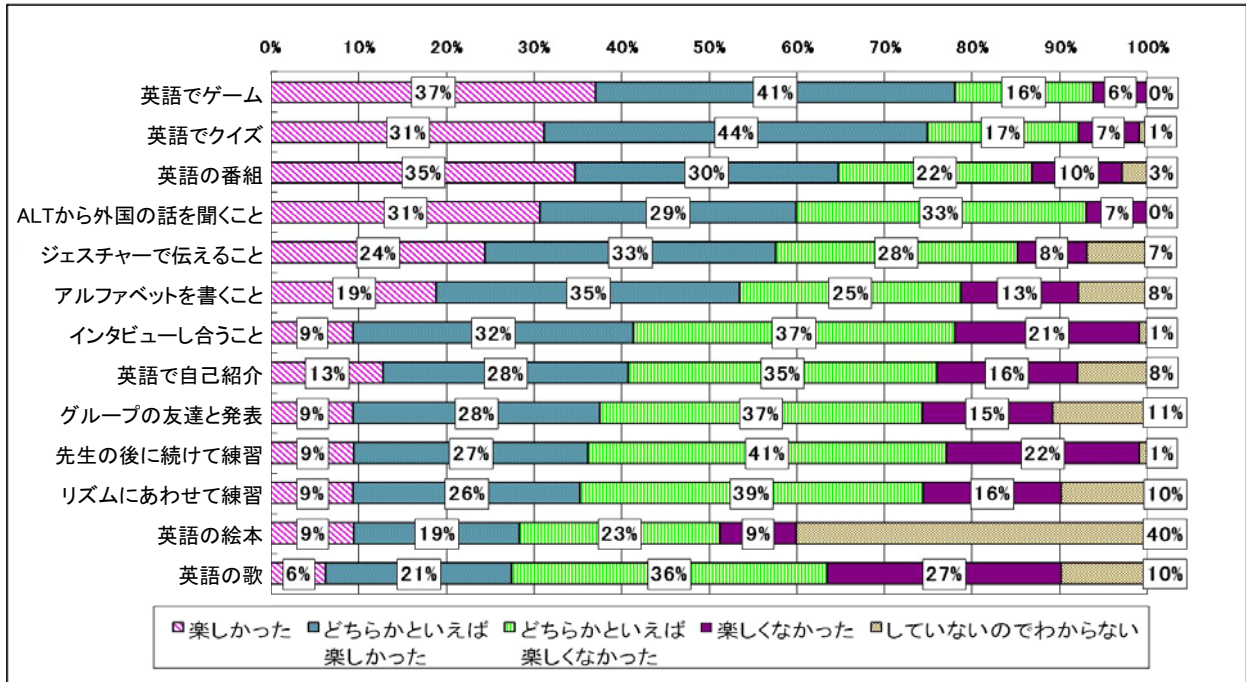


図1 中学1年生へのアンケート「小学校の英語活動でどんなことが楽しかったですか」

<「楽しかった」「どちらかといえば楽しかった」と答えた割合が高かった活動> (図1)

アンケート結果から、「英語でゲーム」は78%、「英語でクイズ」は、75%の生徒が「楽しかった」「どちらかといえば楽しかった」と答えている。ゲーム、クイズは英語を使って友達と触れ合いながら楽しく活動することを目的とした活動である。しかし、外国語活動においては、遊び的な要素がありさえすれば必ずしも「楽しい」と感じるわけではない。「特に楽しかったことはどんなことですか」の記述欄には、次のような記述が多く見られた。

- ・グループのみんなで考えて発表したこと
- ・英語を聞いて何を言っているのかを当てること
- ・友達に何かを伝えて、当たったり、当たらなかったりしたこと
- ・ゲームをしながら英語が分かったり、友達のことが分かったりしたこと

「みんなで」「考える(当てる)」「伝える」「分かる」などの言葉が多く見られ、友達と一緒にゲームをすることや、クイズを解くことに目的意識が感じられるときに初めて「楽しい」と思えるようである。また、「ALTから外国の話聞くこと」も60%あり、ALTトークが、子供たちの心に深く印象づけられているようである。ALTが英語で話していることを100%理解できなくても、外国の文化に興味関心を持ち、「何とか聞き取ろう」とする意欲を持たせることが大切である。学習指導要領の指導内容に、外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるように、その「楽しさを体験すること」「大切さを知ること」が挙げられている。そのことから、英語を上手に話すことではなく、友達と関わりながら、伝え合うことの楽しさと大切さをいろいろな活動を通して心で感じることを大切にしなければならないことが分かる。

(2) 「英語ノート」の構成と活用の工夫

① 「英語ノート」で提示されている活動の構成

「英語ノート」指導資料には、各時間の展開に応じて【Let's Listen】【Let's Chant】【Let's Sing】【Let's Play】【Activity】などが示されている。「英語ノート」はあくまでも外国語活動の目標を達成するための「共通教材」であり、児童の実態に合わせて、それらを効果的に組み合わせることが大切である。

② 各活動の活用の工夫

【Let's Listen】【Let's Chant】【Let's Sing】の活用

これらは、「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付く」ための活動である。「聞く」ことを重視する外国語活動においては、「正しく聞き取る」ことをねらいとせず、「聞いて分かれようとする」意欲・態度面を大切にすべきである。また、チャンツや歌のように、実際に歌ったり、リズムに乗って体を動かしながら繰り返すことで、英語特有のリズム、ストレス、イントネーションについて「体験的に理解を深める」ことができる。

【Let's Play】の活用

小学校の児童は、英語で自分のことを相手に伝えるための表現や語彙はまだ十分に持っていない。自分のことを英語で言えるまでには、その表現に慣れ親しませるために、たくさんの繰り返しが必要となる。直山(2009)は「聞く」ことから「表現」までの過程を「まず、聞いて、繰り返し合い、言い慣れ、覚え、そして、自分が慣れ親しんだ言語材料から語彙や表現を選択し、自分の言いたいことを表現する」としている。この「繰り返し合い」「言い慣れ」「覚え」の過程でこそ、ただ単に繰り返すだけでなく、コミュニケーション活動を重視した活動を工夫しなければならない。「英語ノート」の【Let's Play】として提示されている活動は、まさに楽しく、効果的にコミュニケーション活動しながら「繰り返し」をすることができる活動である。発展的活動と組み合わせることで、様々な活動を考えることができる。そこで注意しなければならないのは、その活動に児童が納得できる「目的」を持たせることである。既に知っていることをインタビューし合ったり、誰に対しても同じ質問をしたり、自分や相手の「考え」を必要としない会話を繰り返したりするだけでは、活動に意味を持たせることはできない。【Let's Play】で言い慣れた表現を、次の【Activity】での活動につなげるなど、ややもすると単調になりがちな「繰り返し」の活動に目的を持たせることが大切である。

【Activity】の活用

【Activity】の活動には、Book1 Lesson 5「自分が買った物を発表しよう」、Book1 Lesson 9「オリジナル・ランチ・セットを紹介しよう」等、各単元の最後に、個人またはグループでの発表活動が計画されている。学習指導要領の目標にある「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」を図るための活動とすることができる。また、学習指導要領「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」にある「友達との関わりを大切にしたい体験的なコミュニケーション活動」をねらいとする活動でもある。自分のこと（自分たちのこと）を相手に伝え、それを理解してもらえたときの達成感や自尊心にもつながる。そして、互いを認め合える授業づくりは、学級づくりへと通じるものである。

【デジタル教材】の活用

学級担任が外国語活動のねらいに沿って授業を進めていけるように、文部科学省より「英語ノート」付属の「指導資料」「CD」「デジタル教材」が配付された。「CD」「デジタル教材」といった音声面でのサポートがあることで、学級担任のみの授業でもネイティブ・スピーカーの発音を授業に取り入れることが可能となった。その中でも「デジタル教材」に関しては、機器設定の不便さ、授業が一方通行になりがちになる等の改善すべき点はあるものの、授業の中に取り入れることで児童の興味・関心が高まることも事実である。【Let's Play】の活動を「デジタル教材」を用いてすることにより、ゲームの進め方に関して児童の理解が高まるだけでなく、ゲームの後の振り返りにおいて、一人ひとりの活動を全体に広めることも容易となる。このように、授業の場面による使い分けも含めた効果的な活用の仕方を今後研究していく必要がある。

2 先行実施で見られた成果と課題

(1) 「英語ノート」活用状況アンケートの分析

① 「英語ノート」の活用状況について

平成21年3月に配付された「英語ノート」をもとに、4月より小学校5・6年で外国語活動がスタートした。移行措置期間での先行実施とはいえ、「英語ノート」が配付されたことにより、注目度は高く、まさに、4月から実質的に始まったといえる。平成20年度より、県や市町の教育委員会が開催する研修会の中でも、「英語ノート」を使った実践例についてグループ協議するなど、情報交換も行われている。「英語ノート」配付1年目における「英語ノート」の外国語活動に果たす役割について、指導者の意識を知るために、平成21年度末の指導者養成研修で下記のようなアンケートを行った。

対象：福井県内小学校5・6年学級担任（坂井・若狭・鯖丹南越地区 回答数267名）

期日：平成21年12月～平成22年1月

内容：「英語ノート」の活用状況・外国語活動の実施状況・今後の研修として必要性を感じるもの

平成21年度、99%の学級担任が「英語ノート」を活用し、そのうち42%が「英語ノート」にそって外国語活動を実施していた（図2）。「英語ノート」が児童一人ひとりに配付されたこともあるが、指導資料にある年間指導計画、各授業案例、CD、デジタル教材等、授業に生かせるものが揃っており、すぐに授業に取りかけられるようになっていたためと思われる。週1時間、年間35時間の外国語活動を新たに進めるのは、大変難しいことである。まず、「何を」「どのように」というところを、各学校で十分検討されないまま先行実施が始まったといっても

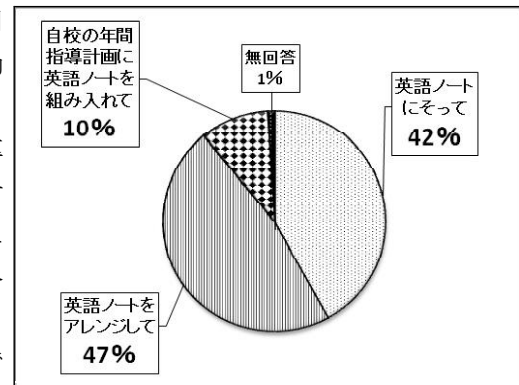


図2 平成21年度の年間指導計画

過言ではない。にもかかわらず、「英語ノート」を活用してよかったと思う点として「指導内容が明確になった」ことが挙げられている（図3）。つまり「何を」年間を通して授業で行っていかばよいか「英語ノート」により明確になったことが分かる。また、「指導方法が分かる」「いろいろな活動例が参考になる」「CD・デジタル教材が役立つ」といった「どのように」という点でも、「英語ノート」の指導資料で提示された内容が役立ったことが分かる。

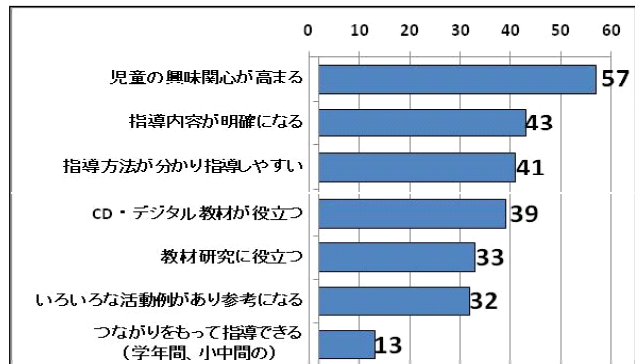


図3 「英語ノート」を活用してよかったと思う点

一方、「英語ノート」活用上の問題点として「英語ノート」のとおり授業をしようとすると「児童の実態に合わない」「全部こなすのは難しい」などの悩みが出てくる（図4）。「英語ノート」はあくまでも共通教材である。「英語ノート」にとらわれすぎることなく、外国語活動の本来のねらいである「コミュニケーション能力の素地」を養うために、いかに効果的に活用していくかが課題となっている。（図3、図4は記述式で書かれたものを内容ごとに分類して集計）

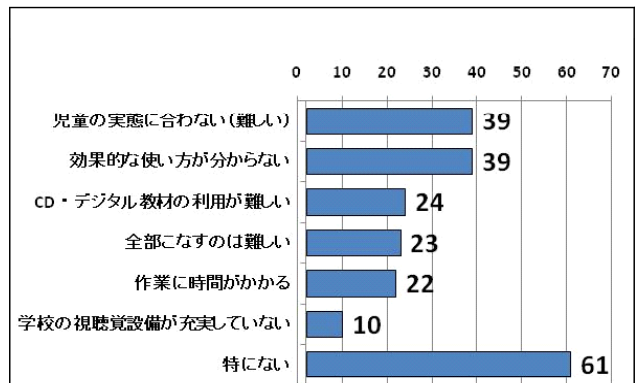


図4 「英語ノート」の活用上の問題点

② 外国語活動の実施状況について

外国語活動の授業形態に関しては、地区によって違いがある（図5）。A地区では、84%の学校で、月4時間、外国語活動をALT等（外国語非常勤講師、JTE）と学級担任とのTTで実施している。一方で、毎時間ALT等とのTTで授業を行えるのは、B地区では49%、C地区では34%の学校にすぎない。B・C地区では半数以上の学校が月4時間の内、ALT等とのTTは1～2時間で、残りの時間は学級担任だけで外国語活動の授業を行っている。「英語ノート」の指導資料の授業案では、ALTとのTTで授業を進めるようになってきているが、実際には、多くの学校で学級担任のみで外国語活動の時間を進めていかなければならない状況にある。そのため、授業の形態によって、使用教材にも差が見られる。

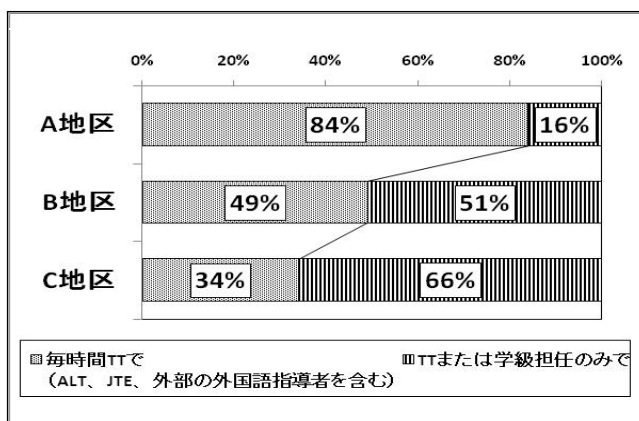


図5 外国語活動の実施状況「授業の形態」

授業でよく使用する教材として「英語ノート」は授業形態に関係なく使用されているが、「デジタル教材」に関しては、A、B、C地区での差が大きい（図6）。A地区のように、毎時間ALTや外部講師とのTTで授業が行われているところは「デジタル教材」の利用率は低く、むしろ外部講師作成の教材の利用率が高い。

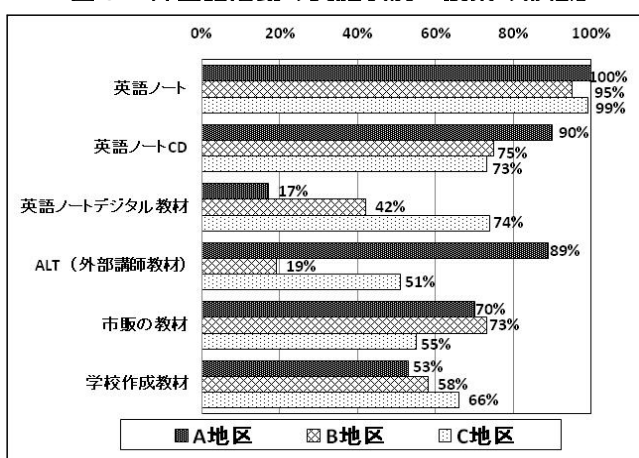


図6 外国語活動の実施状況「授業でよく使用する教材」

一方B・C地区のように、学級担任のみで授業を行うときには、ネイティブ・スピーカーの発音を聞くことができ、しかも視覚的に児童の興味・関心を高める「デジタル教材」の利用率が高くなっている。先行実施1年目において、各学校で授業形態に応じた「英語ノート」の活用が工夫されつつあることが分かる。

(2) 「英語ノート」を活用した自校プランに向けて

今後、「英語ノート」の活用の仕方のみにとらわれることなく、自校の児童の実態に合わせた外国語活動をどのように進めていけばよいのであろうか。今後研修していきたいこととして、教材・教具、歌やチャンツの活用といったスキル面での研修の必要性を感じる割合が高いことが分かる（図7）。しかし、学習指導要領の目標・内容、年間指導計画の作成といった、学校全体で系統性を持って取り組んでいくべきことへの関心は低い。今後、評価も含めた外国語

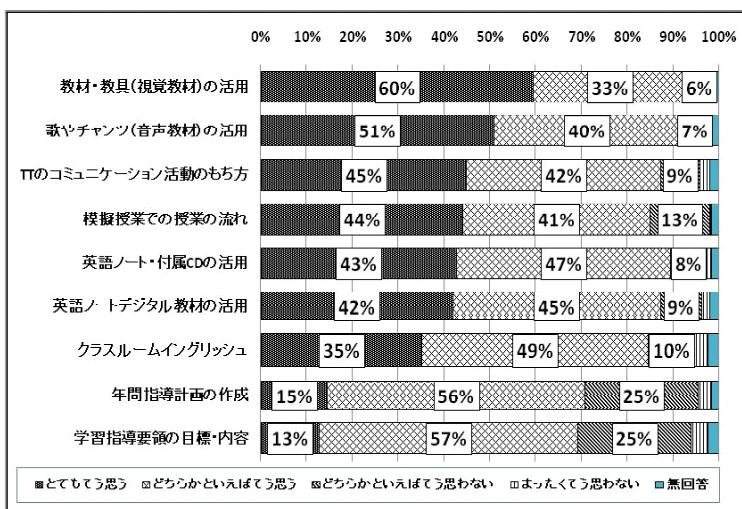


図7 今後研修していきたいと思うこと

活動を各学校の実態に応じて進めていこうとした場合、「何を」育てようとしているのかをより明確にした「自校プラン」の作成が必要になってくる。1時間、1時間の外国語活動の時間は「点」にすぎず、これらをどのようにつなげて育てたい児童の姿にまでもっていくのが明確にわかる系統性を持った年間指導計画が必要となってくる。その中で、「英語ノート」をどのように位置付けていくかを考えていかなければならない。

このような「英語ノート」を活用した「自校プラン」作成のための課題解決型の外国語活動について、次に述べたい。

3 「英語ノート」を活用した授業づくり

～「英語ノート2 Lesson6 “I want to go to Italy.”」の実践より～

(1) 課題解決型の外国語活動

① 児童の意識の流れを重視した単元構成

平成10年に改訂された学習指導要領に「総合的な学習の時間」が設けられたことにより、それ以降「総合的な学習」の一環として英語活動が実施されることとなった。しかし、平成20年3月に公示された学習指導要領に外国語活動が新設され、「総合的な学習の時間」としてではなく、外国語活動として独自の目標・内容を持って実施されることとなった。平成20年度の中教審答申においても「目標や内容を各学校で定める総合的な学習の時間とは趣旨・性格が異なることから、総合的な学習の時間とは別に高学年において一定の授業時間（年間35単位時間、週1コマ相当）を確保することが適当である」とし、週1時間の外国語活動の時間がスタートすることとなった。英語を教えるのではなく、児童のコミュニケーション能力の素地を養うことを一番の目標とした場合、年間35時間の外国語活動の時間で、一定のまとまりをもった活動を構成することの必要性が出てきた。まとまりを持った活動（※「英語ノート」では「単元」(Lesson)としている)を進めるにあたっては、児童が目的意識を持って自主的に取り組めるような活動を工夫しなければならない。総則においても「各教科等の指導に当たっては、体験的な学習や基礎的・基本的な知識及び技能を活用した問題解決的な学習を重視するとともに、児童の興味・関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう工夫すること」とある。このような課題解決型の外国語活動を、高島(2007)は「プロジェクト型外国語活動」として提唱している。プロジェクトを「与えられた（あるいは見つけた）課題、目標のゴール、共同の学び、貢献や発信のある活動を含む『単元』」にとらえ、その過程で、主体的・創造的な学びが児童の中から生まれることをねらいとしている。そして、「ゴールに向けての明確な目的意識があるために、活動が主体的・創造的なものになり、児童の興味は最後まで持続すること」がこのプロジェクト型の外国語活動であり、このような活動を集積した年間のカリキュラムの作成が必要となる。

そこで、「英語ノート2 Lesson6 “I want to go to Italy.”」をもとに、次の点に考慮した単元構成を考え、研究協力校において実践した（表1）。

- まず、ゴール（他者への発信）を決め、それに向けてグループで協力し合いながら、主体的、創造的に活動できる。
- ゴール（他者への発信）に向かって見通しを持ちながら学習を進める課程で自己評価による振り返りを行い、次への学習意欲を持つことができる。
- 教師は、児童の自己評価をもとに励ましや支援をして、学習意欲を持続させるための手立てを持つことができる。
- ゴール（他者への発信）のために必要な英語の表現について、英語ノートのCD、デジタル教材等を活用し、楽しみながら、繰り返し練習することができる。
- 発表のための定型表現を提示したり、児童にグループ内での練習の時間を確保したりするなど、無理のない内容を設定し、活動の後に達成感が味わえるようにする。

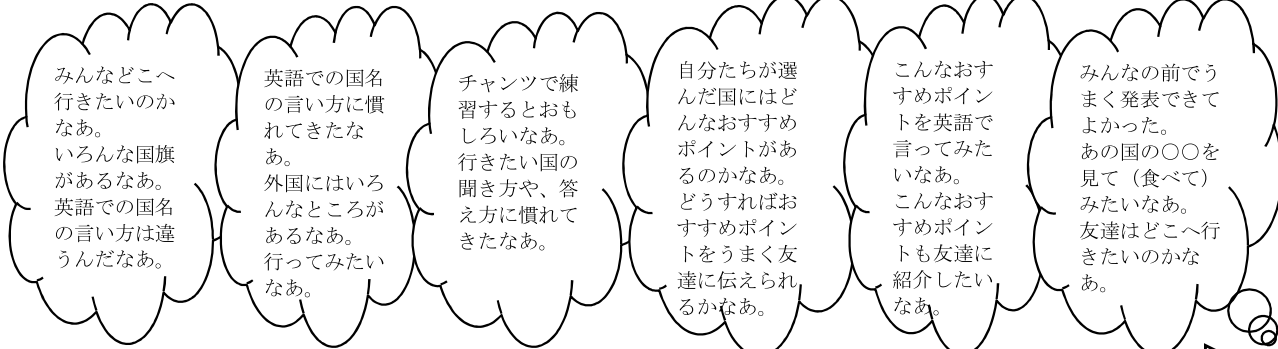
表1 課題解決型の単元構成による実践（6時間配当）

英語ノート2 Lesson6 「行ってみたい国を紹介しよう」 ～ I want to go to Italy. ～

- 単元の目標
 - 行きたい国をその理由とともに発表したり、友達の行きたい国とその理由を聞いたりしようとする。（コ）
 - 各国の国旗や食べ物、建物、自然を知り、世界にはいろいろな文化があることに気付く。（気）
 - 自分が行きたい国やその理由の言い方に慣れ親しむ。（慣）

※1 「コ」：コミュニケーションへの関心・意欲・態度 / 「慣」：外国語への慣れ親しみ / 「気」：言語や文化に関する気付き
 ※2 主な活動の斜体・太字・下線の部分は英語ノートを使用

	1時☆ALT	2時	3時 ☆ALT	4時	5時 ☆ALT	6時 ☆担任
目標	国名の言い方は、日本語と英語では違いがあることに気付く。（気） 国旗あてゲームを通して、各国の国旗や国名に慣れ親しむ。（慣）	行きたい国やその理由についてまとまった話を聞いてその概要が分かる。（コ） 各国の食べ物や建物、自然を知り、世界にはいろいろな文化があることに気付く。（気）	すごろくゲームを通して、行きたい国やその理由の言い方に慣れ親しむ。（慣）	行きたい国やその理由に関するスピーチを聞いて、内容を理解する。（コ） グループの担当する国の見所を伝えるために内容を考え、表現の仕方を工夫する。（コ）	グループの担当する国の見所を伝えるために内容を考え、表現の仕方を工夫する。（コ）	行きたい国をその理由とともに発表したり、友達の行きたい国とその理由を聞いたりしようとする。（コ）
主な活動	①国旗あてゲーム “6年〇組の行ってみたい国” ②P37 Let's Listen (国旗と国名) ③すごろくゲーム “Hello to the world”	①チャンツ “ドイツじゃなくてGermany” ②P39 Let's Listen (行きたい国とその理由) ③いろいろな国の食べ物や世界遺産の紹介(ppt)	①チャンツ “Where do you want to go?” ②すごろくゲーム 国旗・食べ物・世界遺産カードを使って、理由も答えながらグループですごろくゲーム ※②カードを使って行きたい国インタビュー	①P40 Let's Listen (3人のスピーチ) ②P42 World Heritage ③相手に伝わりやすい発表にするための工夫を話し合う ④グループで担当する国を決め、ポスターづくりを始める	①グループで発表の仕方を工夫する。分からない表現をALTに質問する。 ②担当する国のポスターづくり（完成させる）	①グループで発表の練習 ②ペアグループで発表 ③ワークシートに記入 ※②③をグループの組み合わせを変えて ④友達にインタビュー 自分と同じ国に行ってみたいと思っている友達はあるか？
言語材料	Japan, China, Russia, Germany, Spain, Egypt, America, Australia, India, France, Brazil, Korea, Canada, Italy	Where do you want to go? I want to go to～. Japan, China, Russia, Germany, Spain, Egypt, America, Australia, India, France, Brazil, Korea, Canada, Italy	Where do you want to go? I want to go to～. I want to see～. I want to eat～.	Where do you want to go? I want to go to～. I want to see～. I want to eat～.	発表のとき各班に必要な言語材料 I want to go to～. I want to see～. I want to eat～. This is the (great/old/big/wonderful) ○○.	発表のとき各班に必要な言語材料 I want to go to～. I want to see～. I want to eat～. This is the (great/old/big/wonderful) ○○.
評価規準（評価方法）	国旗当てクイズに積極的に参加する。（行動観察） 世界の国名の言い方には、英語と日本語では違いがあることに気付く。（ワークシート）	チャンツのリズムに合わせて、いろいろな国名の言い方に慣れ親しむ。（行動観察） 世界の国々のいろいろな食べ物や世界遺産に興味・関心を持つ。（行動観察）	チャンツのリズムに合わせて“Where do you want to go?” “I want to go to～.”の言い方に慣れ親しむ。（行動観察） 友達とすごろくゲーム（※インタビュー）に積極的に取り組む。（行動観察・ワークシート）	CD（行きたい国やその理由）を聞いて、どんなことが話されているのかを理解しようとする。（「英語ノート」）	グループの友達と協力して、自分たちの国のおすすめポイントを伝えられるように表現を工夫しようとする。（行動観察・ワークシート）	自分たちの行きたい国について、ポスターを使ってその理由とともに発表する。（発表） 友達の発表を聞いて、外国の文化に対する興味・関心を高める。（ワークシート）
準備物	・ワークシート （事前に行きたい国をアンケートし集計しておく） ・すごろく台紙 ・サイコロ	・すごろく台紙 ・サイコロ ・チャンツCD ・いろいろな国の食べ物や世界遺産の紹介(ppt) ☆電子黒板	・チャンツCD ・すごろく台紙 ・サイコロ ・絵本“Hello to the world” ・食べ物・世界遺産カード（掲示用） ・ワークシート	・ポスター作りの材料（旅行パンフレット等） ☆電子黒板	・ポスター作りの材料 ・ワークシート（発表用）	・発表用ポスター（児童） ・ワークシート（発表用） ・ワークシート（単元用）



児童の意識の流れ

② 実践の記録（6時間配当） < 6年生3学級（各29名）、平成22年10月中旬～11月中旬実施 >

第1時<6年〇組の行ってみたい国は？>

「英語ノート」P37「Let's Listen 2」を参考に、色や形でヒントを出し、国旗当てクイズをした。事前にアンケートをし、その結果自分たちの学級の「行きたい国ベスト3」がどの国になったかを予想した後に、クイズをすることにした。<ワークシート参照>

児童は「自分たちの学級の行きたい国ベスト3はどこだろう」という目的意識を持ってクイズに参加していた。クイズやアンケートに出てきた国をALTに英語で言ってもらうことで、日本語の発音との違いに驚いていた。

学年全体の傾向として
 1位 America 29人
 2位 France 12人
 3位 Brazil 5人
 日本を選んだ児童も18人いた。

第2時<世界のいろいろな国>

Warming upで国旗を見ながら、外国の国名をチャンツの曲にあわせてリズムカルに練習した。
 ※チャンツの曲は、「ドイツじゃなくてGermany」（松香フォニックス研究所）を使用。
 ただ練習させるのではなく、曲のリズムに乗って繰り返すことで、英語特有のリズム、ストレス、イントネーションに慣れ親しむことができる。児童も楽しそうに取り組んでいた。
 本時の教材としてALTが外国のいろいろな食べ物や世界遺産についてパワーポイントの資料を作成してくれた。国際理解の窓口となる活動を担ってもらうこともALTの大切な役割である。
 ※学研の『Hello to the world』には、写真や発音のCDもあり、いろいろな国の様子を紹介するのに効果的である。

第3時<行きたい国を尋ねよう>

“Where do you want to go?” “I want to go to ○○.” を繰り返し練習するのに、Michael Jacksonの曲をチャンツに使用した。聞き慣れた曲に合わせて、パターンを変えながら何度も繰り返したが、楽しそうに取り組んでいた。その後、“Where do you want to go?” “I want to go to ○○.” を使ったActivityとして、ワークシートをもとにしたインタビューを取り入れた。国や建物（主に世界遺産）、食べ物がそれぞれ異なるワークシートを使ってインタビューし合うことで、チャンツで慣れ親しんだ表現を実際に生かすことができた。

第4時<グループで発表の準備をしよう>

グループで友達に紹介したい国を決め、その国の何を発表するかを決めた。
 <分担例>

イタリア	エジプト	オーストラリア	中国	ブラジル	フランス	ロシア
サンピエトロ寺	ギザの大スフィンクス・ラクダ	グリーン島・パーベキュー・エアーズロック・ブルーマウンテン	万里の長城・北京ダック・京剧・雑伎団・カンフー・パンダ	サッカー・イグアスの滝・コルコバードのキリスト・フェジョアード	エッフェル塔・ベルサイユ宮殿・モンサンミッシェル・エスカルゴ	エルミターージュ美術館・ピロシキ・マトリョーシカ・クレムリン

インターネットの写真や旅行パンフレットをカラーコピーしたものを使って、発表のポスターづくりをすることにした。紹介したいものの固有名詞等、英語で言うのは難しいものは、このポスターを示して伝えることができる。また、ポスターがあることで発表のとき、共通のイメージを具体的にもつことができる。

第5時<グループで発表の準備をしよう>

発表ワークシートに、定型表現を示した。一斉に何をどのように言うかをALTと練習した上で、自分が言いたい内容については、英語の言い方をALTに尋ねるようにさせた。また、自分のおすすめポイントについて、是非伝えたいことは、日本語で一言紹介してもよいことにした。発表では、言い慣れた表現が使えればよいので、すべて英語で言わなければならないということはない。日本語で一言付け加えてもよいとしたことで、「友達にこのことを伝えたい」という意欲が持てたようである。

<ブラジルチームのポスター>

確かにポスターづくりの時間は、英語での発話は少ない。しかし、このポスターを作りながら、その国のことをより深く知ることができ、外国の文化に対する興味・関心も高まる。この時間も大切にしたい時間である。



Lesson6 ~行ってみたい国を紹介しよう~

6年 232190

はじめにみんなで

We want to go to

一人ずつ順番におすすめポイントの紹介
(Please look at this.)

This is the

nice. (すてき)
 beautiful. (きれい)
 famous. (有名)
 big. (大きい)
 cute. (かわいい)
 old. (古い)

おすすめポイントについてほかにも伝えたいこと

I want to (see/eat/meet)
(I like ~)

最後にみんなで Thank you!

第6時<グループ発表>

ローテーションをしながら、ペアグループで発表を行った。互いの発表の後に、発表する姿でよかったところ、聞く姿でよかったところを指導者が伝えることで、発表を重ねるごとに、「聞く力」「話す力」がスキルアップしていった。振り返りの項目は「今日のプレゼンテーションでがんばったと思うこと」と「友達のプレゼンテーションを聞いて思ったこと」の項目にした。自分のがんばりだけでなく友達のがんばりにも気付けるような「目」を養うこともコミュニケーション能力の育成においては大切である。

Lesson6 "行ってみたい国を紹介しよう"

Do your BEST!

- Big voice
- Eye contact
- Smile
- Try

How do you feel?

今日のプレゼンテーションでがんばったと思うこと

友達のプレゼンテーションを聞いて思ったこと

6年〇組みんなのおすすめポイント

国	心に残ったこと
America アメリカ	
Egypt エジプト	
Australia オーストラリア	
Spain スペイン	
Brazil ブラジル	
France フランス	

I want to go to

裏表に印刷し
活動中と活動後に使用

③ 単元「Lesson 6」の学習後の児童の変容

単元の学習の後でアンケートを行ったところ、次の点で児童の意識の変容が見られた。

※単元の学習前（単元前）と学習後（単元後）に同じ項目で選択式のアンケートを実施。選択肢は「楽しい」「どちらかといえば楽しい」「どちらかといえば楽しくない」「楽しくない」（単元前には「していないので分からない」も加えた。）

単元後アンケートを見ると、「ゲーム」「クイズ」「外国の話」が楽しかったと答えた割合が高いことは、単元前アンケートの結果とあまり変わらない（図8）。一方、「電子黒板で英語ノートをしたこと」「グループで外国のことを調べたこと」という単元後に新設した項目についても「楽しかった」「どちらかといえば楽しかった」と答えた割合は高かった。また、単元前と比較すると「リズムに合わせて英語の練習をしたこと」や「英語で発表したこと」を楽しいと感じた児童の割合が著しく増加していることが分かる（図9、図10）。ゲームやクイズによる楽しさだけではなく、友達と協力して何かをやり遂げたことへの満足感が「楽しい」という思いとなったようだ。

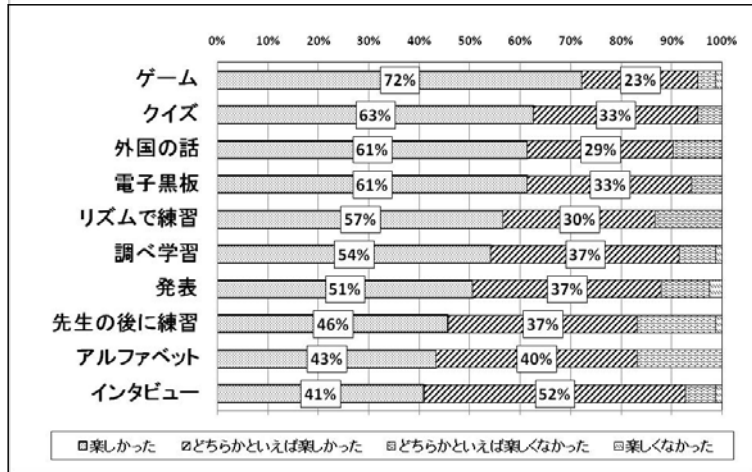


図8 単元後アンケート「どんなことが楽しかったですか」

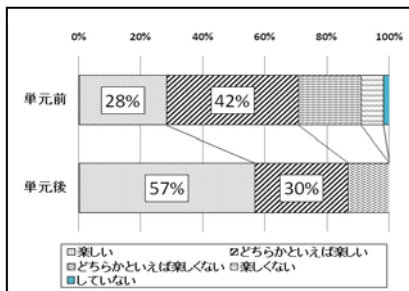


図9 リズムに合わせて英語の練習

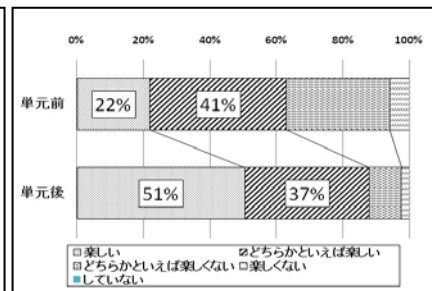


図10 英語で発表

また、振り返りのワークシートに次のような言葉が多く見られた。

<外国の文化に関する興味・関心の高まり>

- 知らないことがいっぱいあったのでとても勉強になったし、行きたい国がたくさん増えた。
- 友達の発表を聞いて世界には行ってみたいところがたくさんあった。大きくなったら行けるといい。
- どの国にも、おもしろいところや、すごい人や、おいしい料理がたくさんあるなと思った。

<発表できたことの達成感>

- 英語で伝えたいことを伝えることができた。英語で一言説明を加えることができてよかった。
- はじめは、自信がなくて声が小さかったけど、2回目、3回目は、はっきり大きな声でできてよかった。

<友達の良さを認める>

- ☆☆さんは、自分より長くて難しい英語を日本語みたいにぺらぺら言っていてすごかった。
- 中国のグループの人はすごくはっきり発表していたし、自信を持っていた。
- みんないろいろなことを調べていてすごくよく分かった。もっといろいろなことが知りたくなった。

学級内でいろいろな国の文化を紹介し合ったことで、他の国の文化に関する興味・関心を高めることができただけでなく、自分が発表できたことで達成感を持ち、自信がついた児童もいた。また、友達の発表の良さを見つけ、「○○さんみたいに発表できるようになりたい」と意欲を持つ児童もいた。友達の発表を見て、「自分もこうなりたい」というモデルを友達の中に見出すことができるたようである。

ただし、課題として挙げられることもある。一つ目は、発表用のポスターを作るのに、予定より1時間多く時間を費やしたことである。外国語活動の中で調べ学習等を必要とする活動の場合、他教科との関連を考慮する必要がある。二つ目は、6時間配当にしたにもかかわらず、自信を持って発表に臨めるほどグループの練習の時間を設定できなかったことである。児童の感想の中にも「もっと自信を持って発表できるとよかった」というものが見られた。そこで、グループ発表を中間発表という一つの通過点として「保護者への発表」または、「他の学級や学年の友達への発表」などの発展の時間を設定できるとよい。児童の感想にあった「聞いていて行きたくなるような発表だったので、私もしっかり発表できるようにがんばりたい。」という意欲が、次の活動へと生かされるような単元構成にすることで目的意識を持ち、より主体的な活動となると思われる。

(2) 評価の方法と工夫

① 指導資料評価の観点

外国語活動の評価について、平成22年3月の「児童生徒の学習評価の在り方（報告）」（以下「報告」）、平成22年5月の「児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」（以下「通知」）において、その指針が述べられている。「報告」の中で学習評価の意義について「学習評価は、児童生徒が学習指導要領の示す目標に照らしてその実現状況を見ることが求められるものである」とあるように、目標と指導、評価が一体のものでなくてはならない。また、評価の観点について「評価の観点を設定し、それに即して、文章の記述による評価を行うこと」、「評価の観点は、中・高等学校における外国語科との連続性について配慮して設定する必要がある」と述べられている。「英語ノート」の指導資料には、各Lessonごとの目標、各時間ごとの目標と評価の観点、方法が具体的に書かれている（表2）。平成23年度からの全面実施に向けて、目標に添って観点をどのように設定すればよいのか、また、どのように評価すればよいのか、ということ指導内容と関連させながら見ることができる。

表2 「英語ノート2」Lesson6 “I want to go to Italy.”（4時間配当）単元の目標と評価の観点

目標	②外国語を通じて積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る	③外国語を通じて、外国語の音声や基礎的な表現に慣れ親しむ	①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める
観点	コミュニケーションの関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
趣旨	コミュニケーションに関心を持ち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。	外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気付いている。
単元の目標	自分の思いがはっきり伝わるようにスピーチをしたり、積極的に友達のスピーチを聞いたりしようとする。	理由を含めて、自分が行ってみたい国を発表する。	世界にはいろいろな英語が話されていることに興味を持つ。
単元の内容	<ul style="list-style-type: none"> スピーチをしたり、友達のスピーチを聞いたりして、スピーチをする楽しさを体験する。 自分の思いがはっきり伝わるようにスピーチしたり、積極的に友達のスピーチを聞いたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 行ってみたい国やその理由を話す活動を通して、英語の音声やリズムに慣れ親しむ。 行ってみたい国やその理由についてのまとまった話を聞いて、その概要を理解することの大切さを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 世界には様々な英語が話されていることに気付く。 A L Tなどの異なる文化を持つ人々と行ってみたい国を話し合う体験をし、文化に対する理解を深める。
各時間ごとの評価の観点	<p>第4時</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の行きたい国について、理由とともに発表しようとする。（行動観察） 自分の行きたい国について、理由とともに発表する。（発表観察） 行きたい国やその理由を聞いて理解する。（行動観察・英語ノート点検） 	<p>第2時</p> <ul style="list-style-type: none"> 行きたい国やその理由についてまとまった話を聞いて、その概要が分かる。（行動観察・英語ノート点検） <p>第3時</p> <ul style="list-style-type: none"> 行きたい国やその理由に関するスピーチを聞いて、内容を理解する。（行動観察・英語ノート点検） 	<p>第1時</p> <ul style="list-style-type: none"> 様々な英語があることを知る。（発表観察）

② 振り返りカードによるポートフォリオ評価

単元を通して、振り返りカードに自己評価を書いてファイルしていった。このようなポートフォリオ評価のねらいとして池田(2010)は次の5点を挙げている。

- ① 子どもの成長と発達を記録する助けとなる。
- ② 子どもが自律的な学習に着手し、それを進めていくための道具となる。
- ③ 教師が、自分の教育実践を反省でき、カリキュラムの評価・改善に関して正しい意志決定ができる。
- ④ 保護者への学校の「説明責任」の材料となる。
- ⑤ 小中連携（外国語活動を中学校の英語につなげる）の橋渡しとなる。

授業を進めていく上で上記の①について振り返りカードの果たす役割は大きい。第1時の振り返りカードにより、外国に関する興味・関心を、また、第2時の振り返りカードにより、チャンツによる“Where do you want to go ?” “I want to go to ○○.” の理解度を知ることができる。また、「難しかった」「わからなかった」という記述のある児童には、次の時間にフォローすることもできる。また、一人の児童の意識の変容を下記のように継続的に記録することで、通知表や指導要録に、観点に沿った評価をすることができる（表3）。

第4・5時のグループ活動に入るとワークシートや制作物の②としての役割が大きくなる。ワークシートに発表の基本的な流れを提示することで、グループでの発表に向けて、児童はどのように学習を進めていけばよいか分かる。また、個々の活動状況を把握しにくいグループ活動において、授業後、教師がワークシートで確認することで、励ましやアドバイス、発表に必要な資料を与えることができる。

③のように教師自身の実践の反省にも役立てることができる。単元終了後にLesson6全体を通しての振り返りを行ったところ、Lesson6での指導の重点項目とした「リズムに合わせて英語の練習をしたこと」や、「友達と英語で発表したこと」を「楽しい」と感じた割合が増えたことは分かったが、インタビュー活動を楽しみと感じた児童が最も少なかったことも分かる（図8, 9, 10）。グループ活動に時間がかかり、インタビューやゲームをして楽しみながら英語表現に慣れ親しませる時間や、発表のためのグループ練習の時間が十分にとれなかったことが反省点として挙げられる。教師がこうした実践の分析を客観的にすることで、次の単元で改善すべき点を明確にすることができる。

④についても、児童のポートフォリオの果たす役割は大きい。通知表の文面だけでは伝えにくい授業でのがんばりを、実際に振り返りカードや発表のポスターなどで、具体的に保護者に提示することができる。⑤についても、一つひとつの単元の振り返りをファイルしていくことで、そのポートフォリオを中学校の4月の導入時に活用するといった活用方法が考えられる。

表3 児童の振り返りをもとにした評価例 <B:big voice, E:eye contact, S:smile, T:try>

氏名	第1時振り返り	第2時振り返り	発表	自分の発表	友達の発表	BEST	評価（教師）
A	普通にイタリアとか言っていたけれど本当は違う。国の名前をいっぱい知ることができてよかった。ゲームでその国の有名なものを知ることができてよかった。	「どこ？」って聞くところが難しかった。でもリズムにのっていたら、スラスラ言えるようになって少しうれしかった。またやりたい。	イタリア・サンピエトロ寺院	今日プレゼンをして、最初はうまくなかったけど、2回目になると楽しくなってきた。なんと笑顔でできたのでよかった。	ブラジルのプレゼンの発表の中に世界三大美港とか、きれいなやつとかがあるので行ってみたいと思った。サッカーとか食べ物とかいろいろ見てみたいと思った。	B 3 E 3 S 3 T 3	行ってみたい国やその理由の言い方をリズムに乗って楽しみながら練習していました。イタリアのサンピエトロ寺院について、英語で自信を持って発表ができました。友達の発表を聞いて分かったことを意欲的にワークシートにメモし、外国の文化に対する興味・関心を高めました。
B							
C							

③ 通知表・指導要録への記載

「通知」には、指導要録への記載について「小学校及び特別支援学校小学部の外国語活動について、設置者において、学習指導要領の目標及び具体的な活動等に沿って評価の観点を設定することとし、文章の記述による評価を行うこと」となっている。「通知」の小学校児童指導要録（参考様式）によれば、平成23年度の全面実施から、外国語活動の記録は、学年ごとに3つの観点別に記載することが求められている（図11）。改めて、目標と一体となった評価の観点を明確にし、活動のどの部分で評価するのかといった評価の方法を考えていく必要がある。年間指導計画の作成にあたっては、評価計画についても具体的に作成する必要がある。

外国語活動の記録		
観点 / 学年	5	6
コミュニケーションへの関心・意欲・態度		
外国語への慣れ親しみ		
言語や文化に関する気付き		

図11 「通知」指導要録（参考様式）様式2（指導に関する記録）

4 教員研修の現状と課題

(1) 福井県における中核教員研修

① 教員研修の意義と役割

平成21年度より先行実施された小学校外国語活動を各小学校でスムーズに進めていくためには、指導者に対する研修が大変重要となる。平成20年度に「小学校外国語活動研修ガイドブック」が文部科学省より出され、その中で、中核教員研修の意義と役割について次のように述べられている。

- 小学校外国語活動の基本理念を理解するとともに、指導力の向上及び英語運用能力の向上を図り、授業を円滑に運営すること
- 各学校において校長・教頭の支援のもと、2年間で約30時間程度の校内研修を運営し、現職の教職員全員に対して上記の内容に習熟させること
- 理論等の知識を得ることにとどまらず、自ら実践を通して効果的な指導法を体得し、様々な実践に対して適切な評価や指導ができるように研鑽すること

このような中核教員研修の役割を担った研修として、福井県では教育研究所における研修講座（集合研修）と、教育委員会における小学校外国語活動指導者養成研修（悉皆研修）がある。

② 教育研究所での教職員研修講座（図12）

研修講座では、教師が児童役となってコミュニケーション活動を体験してもらい、そこで実際に感じたことから、学習指導要領の目標について理解できるような内容を実施した。学習指導要領の目標にもあるように、英語によるコミュニケーション活動について「体験的に理解を深める」ことが大切である。「コミュニケーションを図る楽しさを体験すること」「コミュニケーションを図ることの大切さを知ること」を指導者自身が実際に体験することで、英語を教えることが最も大切なことではないということを実感してもらう必要がある。その上で、学級担任として外国語活動の時間に果たす役割とは何かを理解してもらうために、下記のように【Ⅰ「英語ノート」やデジタル教材を使った外国語活動の進め方を中心とした演習】と、【Ⅱ ALTとのワークショップを中心とした演習】を行った。

- <平成22年度教職員研修講座>
- 小学校における英語活動（Ⅰ）研修講座 ～ICTを活かした英語教材活用術～
（平成22年6月9日実施、参加者13名、講師：県指導主事、研究所所員）
 - 小学校における英語活動（Ⅱ）研修講座 ～ALTとつくる楽しい英語活動～
（平成22年7月6日実施 参加者13名、講師：県（市）ALT 4名）

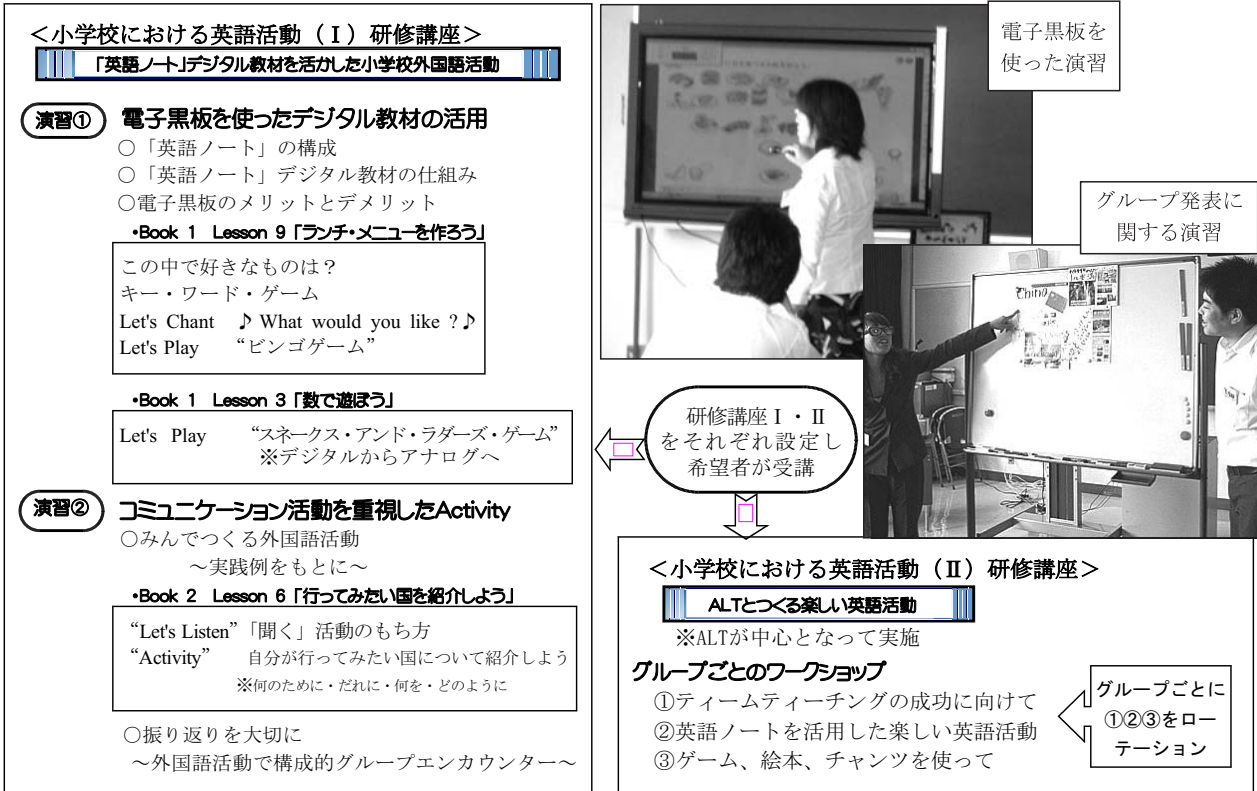


図12 平成22年度「小学校における英語活動（Ⅰ）（Ⅱ）研修講座」の様子

③ マイクロティーチングによる小学校外国語活動指導者養成研修（図13）

福井県では、平成20年度より22年度までの3年間、小学校5・6年の学級担任を対象とした小学校外国語活動指導者養成研修を下記の日程で行ってきた。

<主な研修内容>

第1日目

- ・新学習指導要領における外国語活動のあり方と指導の実際
- ・学級担任単独またはTTによる指導例と演習
- ・「英語ノート」の活用方法
- ・2日目にグループで提案する模擬授業の略案作成

授業実践

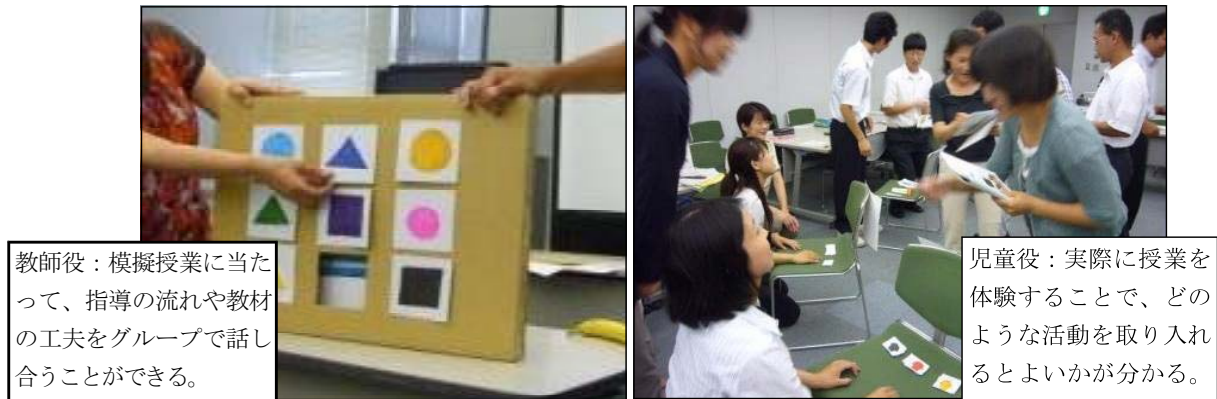
- ・各学校で授業実践をし、その中から2日目の研修に提案する指導案を作成

第2日目

- ・指導案をもとに各校の外国語活動例発表
- ・グループの模擬授業発表準備
- ・模擬授業発表・グループでの意見交換

平成21年度は、大阪樟蔭女子大学教授 菅正隆氏による講義と小中学校教員による情報交換会をさらに1日追加し、3日間で実施

<主な研修内容>からもわかるように、1日目は学習指導要領や「英語ノート」の活用に関して、講師による講義・演習で進められるが、2日目は、マイクロティーチングによる研修が中心となる。マイクロティーチングは企画型研修の形態をとり、参加者が授業者や児童役となって自分たちで考えた模擬授業を行い、その後、他のグループの参加者同士で相互評価を行う。「指導案作成」「教材準備」「模擬授業」「授業の評価」という学校での授業研究に必要な過程を経験し、なおかつ、相互評価を行うことで指導力向上に直結する研修である。また、授業づくりのこつや、教員同士協力して授業づくりをすることのメリットといった、中核教員として校内研修で伝えるべき内容についても研修を通して理解することができる。このようなマイクロティーチングによる企画型研修は、次に述べる授業研究を核とした校内研修の在り方として参考にすべき点が多い。



教師役：模擬授業に当たって、指導の流れや教材の工夫をグループで話し合うことができる。

児童役：実際に授業を体験することで、どのような活動を取り入れるとよいか分かる。

図13 平成22年度「小学校外国語活動指導者養成研修」の様子

(2) これから求められる校内研修の在り方

① 校内研修の内容

校内研修については、小学校のすべての教員を対象に校長のリーダーシップのもと、中核教員を中心に、平成21・22年度の2年間に30時間程度実施するように文部科学省から通知されている。しかし、実際は、校務の多忙さ、学年間の共通理解の欠如等で、研究指定がない学校では計画的に外国語活動の校内研修が進められないのが実情である。外国語活動は5・6年生に導入されたものではあるが、全職員の共通理解と研修推進のリーダーの存在、年間の研修計画がなければ成り立たない。「小学校外国語活動研修ガイドブック」に2年間の研修計画の概要が具体的に提示されている。主な項目ごとにまとめると、校内研修として行うべき内容は次の通りである。

- | | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p><授業指導力向上研修></p> <ul style="list-style-type: none"> ○校内研修オリエンテーション
(小学校外国語活動の理論) ○授業研究
(研究授業・教材作成法・授業案検討) ○学年別教材作成研修会
(児童に合った教材作成) ○指導主事訪問授業研修会
(年間指導計画・評価の方法・指導案作成) ○校内協議会(成果と課題) | <p><英語運用能力向上研修></p> <ul style="list-style-type: none"> ○クラスルームイングリッシュの意義と活用法(CDを用いて) ○クラスルームイングリッシュのブラッシュアップ(ALTを招いて) ○TTで使う基本的な英語表現と授業の進め方 ○「英語ノート」にある歌、チャンツ、ゲーム ○個人研修 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

これらをいかに年間の予定の中に組み入れていくかが重要である。そのための研究推進のリーダーの存在、組織づくりといった校内研修の骨組みもまた同様に必要となってくる。

② 要請訪問研修(図14)

教育研究所での集合研修では、希望者が学校から1名参加するのみで、研修で得たことを校内で伝達する機会はなかなか得られないようである。一方、要請訪問研修においては学校に向いて外国語活動の研修をするので、5・6年の担任だけでなく、管理職をはじめ1～4年の学級担任や養護教諭など全教職員で研修することができ、外国語活動に関して共通理解を持つことができる。また、その学校にある教材やICT機器を使って教室で研修ができるので、どのように授業を進めていけばよいか、具体的なイメージを持つことができる。さらに、その学校が最も重視したい内容を中心に据えた研修プログラムをそれぞれの学校の要望に応じて設定することができる。この要請訪問研修を校内研修の年間研修計画に位置付けることは、校内研修の活性化という点で有効である。

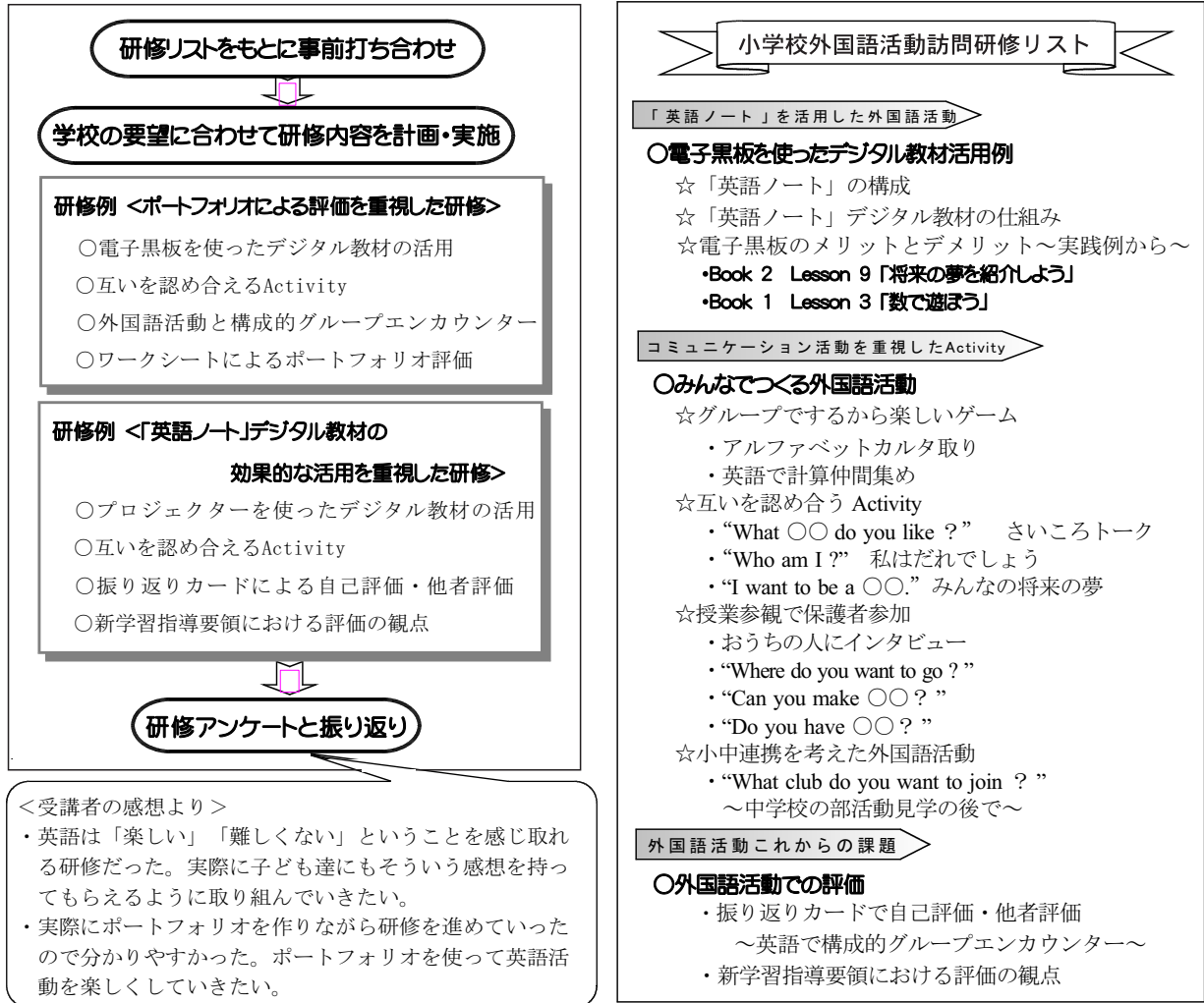


図14 平成22年度「小学校外国語活動」要請訪問研修の流れ

③ 授業研究を核とした校内研修の在り方

福井県では、平成23年度からは教育委員会による中核教員の悉皆研修がなくなり、今後研修するには、希望者だけが何らかの研修に参加することとなる。外国語活動の授業の進め方や「英語ノート」の活用の仕方といったスキル面の向上ばかりではなく、自分たちの学校において、外国語活動をどのように行っていくかということについて共通理解をするための校内研修こそがこれから必要となってくる。効果的・実用的な校内研修として、授業研究を核とした研修が挙げられる。授業研究は全ての教師が日々実践している。授業研究という最も身近なところを核とすることで、それぞれの経験に基づいた様々な考えを交流し合えるからである。そして、授業研究という共通の土台を持つため、全員が主体的に取り組むことが可能となる。要は、それをいかに学校全体で組織的に計画的に行うかということである。さらに、そこで培われた主体的・協働的問題解決スキルは、他教科だけでなく、学校が抱える他の分野での問題解決にも生かせるはずである。

V 研究のまとめ

小学校外国語活動で育てるコミュニケーション能力とは何か、それは決して英語を話せるようになることのみを指しているのではない。外国語を通して言葉の大切さや豊かさに気付き、これらを尊重する態度を身に付けることである。そして、その言葉の奥にある互いの思いを理解し、積極的に伝える

合おうとする態度を養うことにある。小学校の外国語活動においては、それらを「コミュニケーション能力の素地」として養うことをねらいとしている。そして、それは、広くすべての教育活動に通じるものとする。学習指導要領総則の第4「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」に記されていることはすべて、外国語活動の目標及び内容に相通することからもそのことは明白である。これから外国語活動を進めていく上で、この「コミュニケーション能力の素地」を養うこととは何かということへの共通理解をさらに深めていく必要がある。

平成21年度の先行実施より「英語ノート」が共通教材として配付されたことで、ほとんどの小学校で「英語ノート」を使った外国語活動が行われることとなった。教員研修でも「英語ノート」という共通の内容に基づいて情報交換をし、互いに学び合えたことは、最も大きな成果である。また、先行実施の2年間で、「英語ノート」を活用した授業について、指導案や教材が各学校で少しずつ蓄積されていっていることも23年度の全面実施に向けての大きな成果である。確かに、問題点や課題も成果以上に多く挙げられることは、最近の小学校外国語活動に関する様々な研究を見ても明らかである。また、高学年の学級担任にとって「外国語活動の時間」への戸惑いが未だ解消されていないことも事実である。しかし、それらは今後、学校全体で取り組むべき課題である。自分たちの学校にとっての課題を分析し、その課題解決のための研修を自分たちで企画していく必要がある。現在、研修に主体的に参加するために、ワークショップ型による校内研修に関する研究が盛んに進められているが、外国語活動においても、講師による一方的な研修から、参加型の校内研修へと移行していかなければならない。そして、その主体的・協働的問題解決スキルは、他教科の授業研究や学校運営においても活用されるものとなるはずである。今後は、計画的な校内研修の在り方を実践を通して研究していきたい。

最後に、本研究の実施に当たり、アンケートに御協力いただいた先生方をはじめ、授業実践に御協力いただいた福井市社北小学校の先生方には、心より厚くお礼申し上げます。

《引用文献》

- 菅正隆(2010)『「英語ノート」でらくらく授業 5年生』p5 ぎょうせい
- 直山木綿子(2009)「外国語活動における魅力ある教育計画の立案」『初等教育資料7月号No849』P35 東洋館出版
- 文部科学省(2008)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)』
(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf p64)
- 東野裕子/高島英幸(2007)『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』p9 高陵社書店
- 文部科学省(2010)『児童生徒の学習評価の在り方について(報告)』
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/attach/1292216.htm)
- 文部科学省(2010)『小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について(通知)』 (http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1292898.htm)
- 文部科学省(2009)『英語ノート1・2 指導資料』
- 池田勝久(2010)『小学校外国語活動のための校内研修パーフェクトガイド』p84 教育開発研究所

《参考文献》

- 文部科学省(2008)『小学校外国語活動研修ガイドブック』旺文社
- 東野裕子/高島英幸(2010)「プロジェクト型外国語活動における評価」『英語教育8月号』大修館書店
- 菅正隆、梅本龍多 共著『「英語ノート」対応電子黒板活用ガイドブック』旺文社
- 東野裕子/高島英幸(2010)「プロジェクトにおける子どもの変容と校内研修のあり方」『英語教育9月号』大修館書店
- 中嶋雄一(2009)『Hello to the world もっと知りたい あなたの国』(学研大型絵本シリーズ) 学研
- 松香洋子他(2007)『バナナじゃなくてbananaチャンツ』松香フォニックス研究所